不信仰な家族を
守り導かれる神様

創世記37章18～36節
2022年8月7日
松田 基子 師

神様の選びとは、不思議なものです。**ローマの信徒への手紙**、9章11節～13節には、
「その子供たちがまだ生まれもせず、善いことも悪いこともしていないのに、
『兄は弟に仕えるであろう』」
とリベカに告げられました。 それは自由な選びによる神の計画が、人の行いにはよらず、お召しになる方によって進められるためでした。
「『わたしはヤコブを愛しエサウを憎んだ』と書いてある通りです」
とあります。 この様に、全く選ばれる価値無き者を選ばれる神様の一方的な愛と憐れみによって選ばれたヤコブでした。

父を騙し、兄を騙し、祝福の土地を離れなければならなかったヤコブを、神様はその行いが悪いからと言って選びを取り消される事はありませんでした。 神様はヤコブを異郷の地に導き、伯父ラバンに仕えることによって訓練し、家族と豊かな財を与えて、帰郷させて下さいました。しかし、そこには、ヤコブ最大の問題、兄エサウへの謝罪と、和解を果たさなければなりませんでした。 過去の罪は、ヤコブを激しく責めました。

罪の解決は神様以外にはありません。 苦悶するヤコブに、神様の方からヤボク川の渡しで、彼を捕らえ、格闘して彼の全力を引き出させられました。 神様はなんと、彼に負けて下さり、その名をヤコブ(踵を掴む者、押しのける者)から、イスラエル(神は戦う、神支配した給う)と言う名前に変えて下さいました。 その結果、ヤコブは神様に全存在を委ねてイスラエルとなり、先頭に立って、兄エサウに向かい、兄と和解する事ができました。

この様な信仰的経験をしたヤコブでしたから、この後は、
『どんな立派な信仰生活を送った事だろうか』と期待するところです。 しかし、彼は、その様な優等生の信仰生活では無く、むしろ失敗の多い人生を送りました。 そのようなイスラエルであったにも拘らず、神様は、
「あなたと共にいる」
と誓われた約束を、守り続けられました。

神様の選びは、何処までも神様の自由なお考えによるもので、
『生まれながらに罪人である
人間の側には、何の資格も無い』
と言う事が良く分かります。 しかし、だからと言って、そのままの生き方を続けて良いと言うのではありません。 人に求められている事は、資格の無い者を選んで下さった、神様の愛に応えて、悔い改め、悔い改めつつ神様の御心に従って行くことです。

ヤコブはそんな生き方ができたでしょうか。
さて、**創世記**37章1節に、
「ヤコブは、父がかつて滞在していたカナン地方に住んでいた」
と記されています。 そこはカナン地方もベツレヘムから20キロ程、南に位置するヘブロンであることが、後に記されています。 2節には、
「ヤコブの家族の由来は次のとおりである」
とあり、すぐにヨセフの名前が出て来ます。
ヨセフは兄弟の中で11番目なのに、家族の由来、岩波訳では、ヤコブの系図となっていますが、何故ヤコブの系図の最初にヨセフが出て来るのでしょうか。 イスラエル民族は、イスラエルの12人の息子達によってイスラエル12部族が形成されますが、それは一族のエジプトへの寄留から、奴隷となり、出エジプト、カナン定着に至ってからのことです。 ヨセフはそのエジプト寄留の為に、神様に選ばれた人物だからです。

そのヨセフは17歳の時、
「兄たちと羊の群れを飼っていた。
まだ若く、父の側女ビルハやジルパの子供たちと一緒にいた」
とあります。 ヤコブは多くの家畜を飼う遊牧民でした。 ヤコブ自身が羊飼いでしたが、子供達も皆、ヤコブの羊や他の家畜を飼い育てる羊飼

いになりました。 一人前の羊飼いになるためには訓練が必要です。 17歳のヨセフは、羊飼い見習い中でした。 教えてくれたのは、異母兄弟の兄達、ビルハやジルパの子供達でした。
ところが彼らは真面目ではなかった様です。 彼らは、何かやってはいけない事、父ヤコブに知られては困る事を陰でやっていました。

それを見たヨセフは悪気無く、父に報告しました。 当然父親は、彼らを叱ったことでしょう。
告げ口をされた兄達はヨセフを恨み、憎みました。 ところでヤコブは、レアとラケルの姉妹、彼女達の仕え女を側女に4人の妻を持ち、12人の男児と1人の女児の父親となりました。 いくら古代社会とは言え、その家庭には、女性達の葛藤があり、その影響を諸に受けた子供達の精神状態は、何時も不安定で、子供達自身が葛藤に満ちていました。 残念ながら、ヤコブは自分自身が、子供達の葛藤の原因を作っていることに、気付いていませんでした。

彼は最愛の妻ラケルの忘れ形見であるヨセフを偏愛しました。 年寄り子であったとも記されています。 彼は他の子供達が可愛くなかったと言うのではなく、ラケルを失って自分の愛を注ぐ対象を、ヨセフに向けたのでしょう。
「どの息子よりもかわいがり、彼には
裾の長い晴れ着を作ってやった」
とあります。 あまりにもひどい自己満足のための偏愛です。

4節には、
「兄たちは、父がどの兄弟よりも、ヨセフを
かわいがるのを見て、ヨセフを憎み、
穏やかに話すこともできなかった」
とあります。 それは当然のことでしょう。 ヤコブは神様から、イスラエル（神支配し給う）と言う名前を与えられながら、神様の前に平伏して、自分の生き方を正され、聞き従う事をしていません。
あのペヌエル、神様と顔と顔とを合わせたという体験は、何処へ行ってしまったのでしょうか。
一方父親に甘やかされて育ったヨセフは、兄達が自分の存在故に深く傷付き、怒りや憎しみを抱き、苦しんでいる事について、少しも気付いていませんでした。

自分の世界を楽しく生きているヨセフは、17歳にもなって、兄達の心を思いやる事ができない精神的には子供でした。 ヨセフは夢を見ました。 早速その夢を兄達に話しました。
7節から、
「畑でわたしたちが束を結わえていると、いきなりわたしの束が起き上がり、真っすぐに
立ったのです。 すると、兄さんたちの束が周りに集まって来て、わたしの束にひれ伏しました」
と言っています。 イスラエルの一家は、カナンに帰って来てからは、遊牧だけでなく、耕作地も得て、定住に向かいつつありました。 収穫の時期には、一家総出で刈り入れをしたのでしょう。
夢は、ヨセフの束に向かって、兄弟達の束が平伏したと言うのですから、聞かされる方は面白くありません。

日頃の憎しみを一層刺激しました。 8節に、
「兄たちはヨセフに言った。
『なに、お前が我々の王になるというのか。
お前が我々を支配するというのか』」
と反感をあらわにしています。
「兄たちは夢とその言葉のために、
ヨセフをますます憎んだ」
とあります。 ヨセフは、兄達の怒りに燃えたその態度と言葉に接しても、その原因が自分にあり、兄達を傷付けた事が分からないのですから、精神的にとても未熟でした。 その精神的幼稚さが、また同じことを繰り返しています。

9節から、
「ヨセフはまた、別の夢を見て、それを兄たちに話した。
『わたしはまた夢をみました。太陽と月と11の星がわたしにひれ伏しているのです。』
今度は兄たちだけでなく、父にも話した。
父はヨセフを叱って言った。
『一体どういうことだ、お前が見たその夢は。
わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか。』
兄たちはヨセフをねたんだが、父はこのことを心に留めた」
とあります。

古代において、夢は神様からの啓示と捉えられていました。 イスラエル自身、ベテルで、夢を見て、神様の顕現と約束を受け、その約束の成就を体験していました。 ですから、
イスラエルは、ヨセフが夢を見たことについて、
『真剣に耳を傾け、自分自身も神様に尋ね、ヨセフにも夢について、神様の目的を尋ね求める様に、またそれは、神様からの啓示なのだから、神様のお許しがあるまでは、他者に告げてはならない』
と諭すべきでした。

人間は実に**神様に対し**て、**忘恩の罪**を犯す者です。 イスラエルは神様に祝され、多くの財を得、神様の助けと導き、守りによってカナンの地への定住が出来るようになったにも拘わらず、目の前の状況が、平穏であることによって、神様を心から**慕い求め聞き従う**事を**疎かに**していました。 そんな**霊的な眠り**には、**罪が**入り込んで来て、**闊歩する**ものです。

さて、兄達は、多くの羊を養い育てるために、北へ北へと緑地を求めて、遊牧の旅に出かけました。 ある程度の日数が経つと、イスラエルは、シケムに向かった息子達と、家畜が気になり、ヨセフに様子を見に行かせることにしました。
兄達が向かった先のシケムは、歩いて百キロ以上あるでしょう。 素直なヨセフは、直ぐに出かけたのですが、彼は岩山や荒れ野を歩いて行かなければならないのに、なんと裾の長い晴れ着をそのまま着て出かけました。それでも、やっとの思いで、シケムに辿り着きました。しかし、シケムの野原に兄達の姿を見出す事はできませんでした。

さまよっていると、1人の人が
『兄達は更に北のドタンに向かった』
事を教えてくれました。 ヨセフは兄達の後を追いました。 一方兄達は18節を見ますと、
「はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、『ヨセフを殺してしまおう』とたくらみ、相談した」
とあります。 イスラエルには、平穏無事で安泰に見えた家庭でしたが、その実態は敵意を抱き、嫉妬と憎悪に満ちて、いつそれが爆発するか分からない危険をはらんでいました。

19節に、兄の一人が兄弟達に言いました。
「おい、向こうから例の夢みるお方がやって来る。 さあ、今だ。 あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。 後は、野獣に食われたと言えばよい。 あれの夢がどうなるか、見てやろう」
とあります。 人間の憎しみと言うのは、相手を抹殺するまで収まりません。 **怒りや憎しみ**と言うのは、その**人の心を腐らせる**ものです。 怒りや憎しみが、心の中に湧き上がって来ることを止める事は出来ませんが、直ぐに追い出すか、そのまま、心に居座らせるかで、人生は全く変わってしまいます。 兄達は**憎しみの解決**を神様に求めることなく、自分で**抱え込んだ**ために、**憎しみに支配され**てしまいました。

野原には雨水をためておくための、深い穴が掘ってありました。 この時水は入っていませんでした。 兄達はヨセフを殺して、その穴に投げ込んで、
『父には野獣に食べられたと言おう』
という魂胆です。 そして一番恐ろしい言葉は、
「**あれの夢がどうなるか見てやろう**」です。
「**あれの夢**」、
ヨセフの夢は神様からの**お告げ**です。 それに対して、**立ち向かおう**と言うのです。
『神様に挑戦している』
のです。 それがどんなに大きな罪か、兄達は全く気付いていませんでした。

その時、ルベンはさすがに長兄です。
ヨセフを助け出そうとして、21節に、
「命まで取るのはよそう。 血を流してはならない。 荒れ野のこの穴に投げ入れよう。手を下してはならない」
と諌めています。 ルベンには、後でヨセフを助けだそうと言う思いがありました。

一方ヨセフは、懐かし兄達の姿を見つけて、喜びました。 しかし、兄達は、憎しみに満ちた顔でヨセフを捕らえ、着ていた裾の長い晴れ着を剥ぎ取り、穴に投げ込みました。 ヨセフは何

故自分がこんなめに合わされるのか、理由が分からず、
『助けて・・・・・』
と叫んだでしょう。 しかし兄達はその声に、自分達の非道さを感じる事もなく、腰を降ろして食事を始めました。 そこにはヨセフがヘブロンから長い道を、
『兄さん達を喜ばすために』
と担いできた食べ物も広げられていた筈です。何の痛みも感じる事無く、彼らはそれを久し振りの御馳走として、食べたのです。

憎しみはこの様に、人の心を麻痺させてしまいます。 ヨセフにとっては絶体絶命の時でしたが、神様の御手は動いていました。 兄達は食事をしながら、遠くを見ると、ギレアドの山地からイシュマエル人の隊商がやって来るのが見えました。 らくだに、樹脂、乳香、没薬を積んで、エジプトへ行くのです。 それを見たユダは、
「**あのイシュマエル人に売ろうではないか**」
と提案しました。

話しがまとまった所に現れたのは、28節に、
「**ミディアン人の商人が通りかかって、ヨセフを穴から引き上げ、銀20枚でイシュマエル人に売ったので、彼らはヨセフをエジプトに連れて行ってしまった**」
とあります。 ここで、ヨセフはイシュマエル人とミディアン人のどちらに売られたのか、という問いが出てくるのですが、2つの伝承から生じた混乱であろうとの説もあります。いずれにしても、ヨセフは神様の御計画に依って、エジプトにつれて行かれなければならなかったのです。

その場にいなかったルベンは帰って来て、ヨセフがいなくなったことで、衣を引き裂いて、長男の務めが果たせなかった事を悔やみ悲しみました。 集団の力は悪に傾くと恐ろしいものです。 10人の兄達のヨセフに対する憎しみは、1人1人その度合いが違っていました。 しかし、それが集団になると、最悪の罪を犯してしまうのです。

隊商が出現した事は、ヨセフを助ける為の神様の導きでした。 一方、兄達は自分たちの罪を隠すために雄山羊を殺して、その血にヨセフの衣を浸すと、人を遣って父の許に送り届け、
「**『これを見つけましたが、あなたの息子の着物かどうか、お調べになってください』と言わせたのです。**」
罪は勇気をもって追い出さなければ、更に深く大きくなります。 兄達は父を欺きました。
父イサクを欺いたヤコブは、息子達から欺かれ、悲しみのどん底に突き落とされてしまいました。
イスラエルの家庭は、大きな罪を抱え込みました。
神様の祝福を受け継げるのでしょうか。 神様の目は、ヨセフに留まっていました。 ヨセフはエジプトにつれて行かれ、ファラオの宮廷の役人で、侍従長であったポティファルに買われ、新しい神様の業が始まって行きます。

神様は不信仰なイスラエルの一族を、見放される事はありませんでした。 人間の**不信仰にも拘わらず**、神様はともに歩き、助け、ご自身の**御心を成し遂げ**て行かれます。 今日私たちは、イエス・キリストの御救いを頂きながら、なお不信仰な罪深い者ですが、そんなわたしたちを神様は決して見捨てる事無く何時も共にいて、**御国への道を導いて**下さるのです。 私達はその御愛に気付き、悔い改め、神様の御心を求めて行く者とならせていただきましょう。

お祈りを致します。
愛と憐れみに満ちておられる天の父なる神様

神様の一方的な御愛により、イエス・キリストの御救いを頂きながら、不信仰に陥る罪をお赦し下さい。

神様の御愛の大きさを深く知る者とならせてくださり、直すら主に従って行く者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストのお名前によって
お祈りをいたします。
アーメン。